

# ポエティウス『イサゴーゲー注解』

## における普遍の問題

——伝統的認識論との関わりについての予備的考察——

石井 雅之

ポルピュリオスの『エイサゴーゲー』によれば、類と種に関する問題は、当時までに次のような仕方で行われていたという。(a) *εἴτε ὑφέστηκεν εἴτε καὶ ἐν μόναις φιλαῖς ἐπινοίαις κεῖται* (b) *εἴτε καὶ ὑφeschηκότα σώματά ἐστιν ἢ ἀσώματα* (c) *καὶ πότερον χωριστὰ ἢ ἐν τοῖς αἰσθητοῖς καὶ περὶ ταῦτα ὑφeschῶτα* (p. 1, 9-12 Busse, CAG 4, 1)<sup>1)</sup>.

ポエティウスは、『イサゴーゲー注解第二』において、(I)ポルピュリオスの整理したそれらの問いの自らによる訳と、(II)その解釈、および(III)それにまつわる論点、さらに(IV)それに対する或る解決策を紹介した。そのことが、結果的に、(I)～(IV)の四点と、それに関わる用語法とを後世に伝える貴重な役割を果たすことになり、いわゆる普遍論争は、それを議論の一つの重要な源泉として繰り返されたと見られる。

それゆえ、ポエティウスの名は、その長期に亘る普遍論争の歴史との関連において、しばしば言及される。しかしながら、(1)ポエティウスが伝えた事柄と用語が、いかなる前史ないしは伝統を担ったものであったのかということについては、未だ十分解明されようとしていない。また、(2)ポエティウスその人の思索の展開の中で、いかなる理解のもとにそれらの事柄が論述され、それらの用語が用いられたのかということについても、解明されようとしていない。関心を、後世の普遍論争にのみ置く限り、すなわち、後世の人々がポエティウスの論述をどう理解し、どう発展させたかということのみに置く限り、そのようなことの解明をさしあたり留保する立場も成り立つであろう<sup>2)</sup>。だが、哲学的により広い視野を求め、古代から連続と繋る哲学的思索の伝統のいわば一筋をポエティウスに見ようとするとき、上記のことを少なくとも解明しようとすることは不可欠のことであると考えられるのである。またその解明の試みは、後世の普遍論争のより深い理解に繋がっていくとも考えられるであろう。

もとより、これらの問題そのものは、必ずしも解明できるとは限らないであろう。だが、少なくとも、展望をひらくような視点ないし事柄を、個々に指摘することはできると考えられるのである。そのような視点を見つけ出すために、われわれはまず、(A)『イサゴージェー注解第二』の普遍の問題に関わる箇所の論述のいかなるものかを、より正確に把握しておかなければならないであろう。そしてそのうえで(B)その箇所の論述の特徴に則した解明のための視点を探り出さなければならないであろう。本稿では以下に、先に示した(1)(2)を探るための予備作業として、(A)(B)に関する筆者の考察の一部、すなわち、認識論的側面についての考察を示しておくことにする。

### (A) 普遍の問題に関わる箇所の認識論

『イサゴージェー注解第二』の普遍の問題に関わる箇所は、CSEL版で9頁ほどである (pp. 158, 21-167, 20 Brandt, CSEL 48)<sup>3)</sup>。その実質的部分は、大きく分けて次の四つの部分からなると考えられる。(I) ポルピュリオスの原文 (p. 1, 9-14 Busse) の訳 (159, 3-9)、(II) 問い(a)~(c)の敷衍ないし解釈 (160, 2-161, 7)、(III) (a)~(c)にまつわる論点の提示 (161, 14-164, 1)、(IV) 或る解決策の提示 (164, 2-167, 12) という四つの部分である。以下、(I)の主要部分を示したうえで、(II)の概要と、(III)(IV)における認識論上の論点をとらえることを試みておく。

#### (I) 三つの問いの訳

ボエティウスは、*ὑφίστηκον* を *subsistunt*, *ἐπινοια* を *intellectus*, *σώματα* を *corporalia*, *χωριστά* を *separata a sensibilibus* とし、三つの問いを次のように訳している。(a) *siue subsistunt siue in solis nudisque intellectibus posita sunt* (b) *siue subsistentia corporalia sunt an incorporalia* (c) *et utrum separata a sensibilibus an in sensibilibus posita et circa ea constantia* (159, 4-7)。

#### (II) 問い(a)~(c)の敷衍

(i)(a)の敷衍 (160, 2-10): およそ *animus* は、何かを *intellegere* するとき、[1] *id quod est in rerum natura constitutum* ないし *ea quae sunt* を *intellectus* (思念) によって (*uerus intellectus* として) とらえ、*ratio* によって記述する<sup>4)</sup>か、[2] *id quod non est* を *uacua imaginatio* によって思い描くだけかのいずれかである。したがって、種や類を *intellegere* するという場合も[1]か[2]のいずれかである。

(ii)(b)の敷衍 (10-18): (b)は、[1]の場合に問われる。つまり、その場合、*intellegere*

される類の *natura* が問題となるのである。ところで、あらゆるものは [1-1] *corporeum* か [1-2] *incorporeum* かのいずれかであるから、類と種もそのいずれかにおいて存在する (*in aliquo horum esse*)。だが、そのいずれか一方に限定的に存在するといえない以上、類・種そのものが [1-1] であるか [1-2] であるかが問題となってくる。(この論には、*incorporeum* から *intellegere* されるものは *incorporeum* であり、*corporeum* から *intellegere* されるものは *corporeum* であるという前提があると考えられる。)

(Ⅲ)(c)の敷衍 (18-161, 7): (c)は、[1-2]の場合に問われる。すなわち、類や種は、[1-2-1] *circa corpora* に *subsistere* するのか、[1-2-2] *praeter corpora* に *subsistere* するのがさらに問われる。そうした問いが提出されるのは、次のような理解があるからである。 *duae quippe incorporeorum formae sunt, ut [1-2-2] alia praeter corpora esse possint et separata a corporibus in sua incorporitate perdurent, ut deus, mens, anima, [1-2-1] alia uero cum sint incorporea, tamen praeter corpora esse non possint, ut linea uel superficies uel numerus uel singulae qualitates, quas tamen si incorporeas esse pronuntiamus, quod tribus spatiis minime distendantur, tamen ita in corporibus sunt, ut ab his diuelli nequeant aut separari aut, si a corporibus separata sint, nullo modo permanent* (160, 23-161, 7)。

ここに示された理解の仕方が、あとの解決策前半の行論を支配するものとして重要だと思われる。特に、(c)の問いの訳における *separata a sensibilibus* が *separata a corporibus* に置き換えられてしまっていることに注意しておきたい。

### (Ⅲ)(a)~(c)にまつわる認識論上の論点の提示

続く 161, 14-164, 1 では、(a)~(c)にまつわる論点が提示される。ここで、認識論上の論点は、存在性をめぐる論点を紹介する比較的長い部分 (161, 14-163, 6) に続いて、ごく簡略に述べられる (163, 6-19)。その要点は次のようである。

*res subiecta* がなければ *intellectus* は生じない。そして、*intellectus* はすべて、[1] *res subiecta* からありのまま (*ut sese res habet*) に生じるか、[2] ありのままではなく (*ut sese res non habet*) 生じるかのいずれかである。(b)以下の問いは、[1]の場合に問われるのである (10-14)。[2]の場合は、生じた *intellectus* は空虚で (*uanum*) あり、偽で (*falsum*) あることになる (14-19)。ここに、[2]の場合は、通例、(b)以下の問いが問われる場合から除外されていることが示唆されていると考えられる。

ボエティウスは、このあと、存在性をめぐる論点と認識論上の論点の簡単な総括(163, 19-164, 1)を経て、或る解決策の提示に入る。

#### (IV) 或る解決策の提示と認識論

解決策を提示する論述は、論述者自らの立場を留保したまま、アレクサンドロスという他人の説を取り入れる、ないし紹介するというかたちをとっている (cf. 164, 4; 167, 12 sqq.). そのため、論述内容に不整合や曖昧さが見られたとしても、その責任が論述者ボエティウスにあるのか、紹介の対象となった元の論そのものにあるのか、あるいは媒介者などそれ以外のところにあるのかが、必ずしも明らかにならない。しかも、アレクサンドロスの現存著作に明らかな証言は見出されていないのである<sup>5)</sup>。その意味で、少なくともこの箇所だけを見る限り、その論の哲学史的位置づけはたいへん困難であるといわなければならない。

しかし、ともかくも、まずさしあたっては、この箇所の論に含まれる問題点を見つけ出しておくことが求められよう。

さて、その論の全体は、次の三部に分けられる。(i)abstractio を導入する部分(164, 5-166, 8)、(ii)similitudo を導入する部分(166, 8-167, 7)、(iii)総括:(a)~(c)の問いに対する解答(167, 7-12)の三部である。以下、ここでは焦点を(i)に絞って、その要点に若干の解釈を、問題点を見つけ出すという目的にそう限りで加えてみることにする。

(i)の部分は、認識論上の見方の転換を行うことによって、つまり、(III)の論で前提されていた認識論上の論理(これは、(b)の問いの敷衍に際しても、暗黙裡に前提されていたものであった)を覆すことによって、(b)(c)の問いに整合的な解答を得る途を求めようとするものである。つまり、intellectus は、subiectum のあり方そのままでもなくとも、必ずしも空虚で偽であるわけではない、偽となるのは、natura においては結合していないものどもの intellectus を imaginatio によって結びつける (componere, coniungere) ことによって生じるもの(例えば、馬と人の intellectus を結びつけて生じたケンタウルス)だという(164, 5-12)。

このテーゼは、その前半が, corporeus(um) なあり方か incorporeus(um) なあり方かという二分法に専ら関連づけられつつ<sup>6)</sup>、その枠内で、いわば認識の modus と存在の modus を或る意味において何らかの程度まで区別することになるような局面を露呈させることになったと考えられる。以下、その辺の事情を確認しておこう。

この箇所の論述の前提には、予め提示されていた次のような理解がある ((II)の(ii)

(iii)参照). およそ事物は [1-1] corporeum か [1-2] incorporeum かのいずれかである。ところが, [1-2] は, さらに, 次の二種に分けられるというのである。[1-2-1] corpora から離れて (separata) は存在しえないものと, [1-2-2] corpora から離れて存在するものである。

問題となるのは [1-2-1] である。これは, incorporeum の一種とされているものの, 他方, corpora から離れては存在しえないとされる以上, 現実における存在の modus においては, 正に corpora と不可分のものとしてしか存在しないといわなければならないのである。したがって, 現実における存在の modus においては, むしろ, (α) corpus と非分離的な incorporeum の結合体と, (β) 分離的な incorporeum, と敢えて上の用語法によるならば表現するしかないような二種に分類されるだけのはずである。

ところが, すべての事物は [1-1] corporeum か [1-2] incorporeum かのいずれかである, というように表現される前提に則する思考をそこに持ち込んでいることによって, (α) のいわば一要素を, 何らかの意味で切り離されたものとして, (β) とともに, [1-2] の枠によって括ろうとすることになるのである。するとその場合, それらの思考を整合的に組み合わせようとするならば, (α) のいわば一要素が単独で [1-2] に入るような modus を, 存在の modus とは別のところに求めるという途が浮かび上がってくるであろう。そのような modus がいわば認識の modus であったと考えられるのである。ポエティウスは, この辺の事情を丁寧に区別して述べてくれているわけではないわけだが, 少なくとも, abstractio 説の導入に基づく解決策が目指していた, あるいは向かっていた方向は, 以上のような途に沿うものであったと思われる。

さて, この解決策においては, 次のような認識能力が想定されている。(i) sensus は, [1-2-1] を, corpora と結合したまま (corporibus coniuncta, 165, 5) [つまり (α) のあり方そのままに] 取り込む (cf. 164, 20-165, 7)。ここには, 次の(ii)の場合に言われる incorporeus intellectus に対応する, いわば corporeus intellectus が想定されていると考えられる。そして (ii) animus (ないしは mens. 165, 17) には, 次の二つの能力がある。(ii-i) [1-2-2] を対象として [ (β) のあり方そのままに ] incorporeus intellectus を得る能力 (cf. 165, 10-12)。(ii-ii) [1-2-1] を対象として sensus が得たものを受け取って (capere), ないしは sensus から取り次ぎを受けて (tradi), そこから incorporea natura (165, 5-6) ないしは incorporeorum natura (165, 13) を分離して (diuidere, etc.) 観想する能力 (cf. 164, 21-165, 16)。この (ii-ii) の場合における animus に

よる分離の作用が *abstractio* と呼ばれるのである<sup>7)</sup>。こうして、(α)のいわば一要素が単独で [1-2] に入るような場合を (ii-ii) の働かないしは所産に見ようとしていると考えられるのである。

ところで、類や種は、[1-2] *incorporeae res* に見出される場合と [1-1] *corporea* に見出される場合とがあるが、それぞれ (ii-i), (ii-ii) の能力によって得られるものだという (165, 9 sq.)。ここにおいて、類や種の *natura* は少なくとも認識されたものとしては (*intellectus* としては) *incorporeus* であると想定されていることが明らかになる。つまり、認識論の領域におけることとして、そうした想定に見合う理論が求められたのだということになるであろう。ところが、この解決策の論者としては、そのような認識論によるのみで、(b)の問いに対する答えを端的に *incorporalia* であるとしたと考えているのである (167, 9)。しかし、実のところそのことについては、認識されたものとしての限りのことしか論じられていないと解されるわけである。

その辺の事情は、(c)の問いに関わる論述内容を吟味してみればいっそう明らかになる。まず、(ii-i) の場合、類や種は、*incorporeum* から *incorporeus intellectus* として認識されるのである以上、*animus* によってとらえられているか否かにかかわらずつねに、*incorporeum* であるといえる。したがって、それは、少なくとも何らかの意味で、*incorporeum* として存在するといえるであろう。問題となるのは、(ii-ii) の場合である。この場合、類や種は、*animus* によってとらえられた *intellectus* としての限りで *incorporeus* であるはずである。したがって、認識するもののいわば認識作用に掛かっている間以外は、ただ *corpora* と結合したかたちでしか存在していないということになるはずである。ここにおいて、その場合の類や種は、*incorporeum* としての資格において存在するのかが問題となるはずなのである。ところが、解決策の論者は、その点に立ち入ることなく、ただ、それらは「*corpora* においてその存在を持つ (*in corporibus esse suum habere*)」(cf. 165, 2; 164, 14 sq.; 167, 11 sq., etc.) などという説明を随時加えて済ますのみである。

このあと、解決策の論者は、*similitudo* ないし *substantialis similitudo* の概念を加え入れることによって、今度はさらに、複数の個物と種ないし類の関係の問題を説明しようとする。これによって、類・種の一性に関する問題 ((III) の前半部で提示されている) の解決に向かおうとしたものと考えられる。本稿では、この箇所については論じないが、その論を経ても、*abstractio* を導入した論に垣間見られた問題点は克

服されてはいないと思われる。

### (B) 解明のための視点

さて、以上の考察に基づき、abstractio を導入した論述に関して、はじめに示した(1)(2)を探るための若干の視点を簡単に指摘しておく。

(1)前史ないし伝統を探るための視点としては、次のことが挙げられる。(i) abstractio 説を支える認識論、すなわち、認識能力として sensus と animus (mens) を上に示したように区別し、さらに animus の一能力として imaginatio を加える (cf. 164, 7-12; 165, 3-4) 説の系譜。(ii) abstractio 説に関わる用語法とその系譜。(2)ポエティウスの思索の展開との関わりについては、abstractio を導入した論および後のポエティウスの著作における認識の modus と存在の modus の区別の如何ということが重要であろう。

(1)の(i)に関しては、アリストテレス『デ・アニマ』の解釈史が注目される<sup>8)</sup>。(1)の(ii)に関しては、(ii-i) abstractio が diuisio (および assumptio) と言い換えられていること (164, 12; 166, 3), (ii-ii) abstractio と separare の意味関係が明確に示されていないこと (cf. 164, 13-20) が注目される。また、(ii-iii) 『三位一体論』第2章の観想的哲学の区分論において、inabstracta, separare と並んで ἀνπεραιρέτος なる用語が用いられていることも注目される<sup>9)</sup>。(2)に関しては、corpora から離れて存在する、と言われるときの「離れて (separata)」と、incorporea natura ないし incorporeorum natura を分離して観想する、と言われるときの「分離して (diuidere, etc.)」の区別の有無がどう説明されていくかという点が注目されるであろう<sup>10)</sup>。

### 註

- 1) これらの問題が重要な問題と見なされ、かつ難問とされていたことは、ポエティウスによっても示唆されている (*Isag. ed. sec.* pp. 159, 17-160, 2 Brandt, *CSEL* 48. Cf. *Cons. Ph.* 5, 5, 5-7 Bieler, *CCSL* 94)。
- 2) Cf. J. Reiners, *Der aristotelische Realismus in der Frühscholastik*, Bonn, 1907. [稲垣良典訳『中世初期の普遍問題』(創文社, 1983年)所収の邦訳によって参照]
- 3) 以下、この著作の箇所への指示については頁数と行数のみを以てする。
- 4) [1]については、136, 5-6 をも参照。

- 5) なお、普遍に関するアレクサンドロスの見解については、M. M. Tweedale, "Alexander of Aphrodisias' Views on Universals", *Phronesis* 29 (1984), 279-303 を参照。
- 6) 166, 6-7 の *sensibilia* は、明らかに *corporalia* (= *σώματα*. (I) 参照) と同義で用いられている。
- 7) ただし、*abstractio* という語は二度用いられるのみである (164, 12; 166, 3)。
- 8) Cf. *Isag. ed. pr.* pp. 24, 3 sqq.; *Isag. ed. sec.* pp. 136, 2 sqq.; *Int. ed. sec.* pp. 27 sqq. Meiser; *Cons. Ph.* 5, 4, 27 sqq.; 5, 5, 2, sqq. なお、P. Courcelle, *La Consolation de Philosophie dans la tradition littéraire*, Paris, 1967, p. 220. および、H. Chadwick, *Boethius*, Oxford, 1981, pp. 131 f. をも参照。
- 9) Cf. *Isag. ed. pr.* pp. 8, 1-9, 12. なお、アリストテレスの観想的哲学の区分論については、この場合、『形而上学』第6巻第1章および『デ・アニマ』第1巻第1章が重要だと考えられる。Ph. Merlan, *From Platonism to Neoplatonism*, 1953; Third edition, revised, The Hague, 1975, pp. 59-87 をも参照。
- 10) Cf. *De Trin.* cap II. そこでは、*a corporibus actu separari* という把握が得られかけているのが、一箇所だけながら見られる。なお、ヘルメイアスの子アンモニオス (P. Courcelle, *Les lettres grecques en Occident*, Paris, 1943; 1948<sup>2</sup> においてポエティウスとの親近性が強調された) は、観想的哲学を区分するに当たって、*τῆ ὑποστάσει χωριστά* と *τῆ ἐπινοίᾳ χωριστά* という区別をしている (*In Isag.* pp. 11, 21-12, 11 Busse, *CAG* 4, 3)。また、こうした論点の淵源と目されるアリストテレスの言及についても、今改めて、トマスに基づく読み込みを脱した、それ自体としての理解が求められるところであろう。J. Cleary, "On the Terminology of 'Abstraction' in Aristotle", *Phronesis* 30 (1985), 13-45 はその方向での研究であり、アリストテレスのいわば認識論を 'abstractionist' とみなす立場に対する批判を試みているものとして参照されてよいであろう。M.-D. Philippe, "'Αφαίρεσις, πρόσθεσις, χωρίζεω" dans la philosophie d'Aristote", *Revue Thomiste* 47 (1948), 461-479 もその批判の対象となっている。さらに、アリストテレスの造語と見られる *χωριστός* が本来いかなる意味で用いられていたかについては、D. Morrison, "*Χωριστός* in Aristotle", *Harvard Studies in Classical Philology* 89 (1985), 89-105 (全用例の Index を含む) が参照されるべきであろう。